



Title	現実世界状況法によるパーソナル・スペースの測定
Author(s)	山口, 千晶; 山, 祐嗣
Citation	対人社会心理学研究. 2016, 16, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57809">https://doi.org/10.18910/57809</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 現実世界状況法によるパーソナル・スペースの測定<sup>1)</sup>

山口 千晶(神戸大学大学院人文学研究科)

山 祐嗣(大阪市立大学大学院文学研究科)

本研究の目的は①Novelli et al. (2010)の「現実世界状況法」を用いてパーソナル・スペースの測定を試みること②二つの状況要因(親近度・身長)がパーソナル・スペースに及ぼす影響の検討であった。実験参加者はサクラと共に、なじみのある話題(フィラー課題)について会話するため椅子を配置するよう指示され、その際の実験参加者の椅子とサクラの椅子との距離をパーソナル・スペースとして測定した。実験参加者とサクラが知人である親近度高条件と見知らぬ者同士である親近度低条件が設定された。実験参加者とサクラが親しくない時、パーソナル・スペースを大きくとった。また実験参加者の身長がサクラより低いと実験参加者は威圧感を感じパーソナル・スペースをより大きくとると予測したが、実際は実験参加者自身の身長がサクラより高い場合パーソナル・スペースをより大きくとった。他者との距離の取り方は自己防衛としてではなく、他者への配慮が働いたためと考えられる。

キーワード: パーソナル・スペース、現実世界状況法、生態学的妥当性、親近度、身長

## 問題

パーソナル・スペース(personal space)とは、個人が心理学的に自分のものとする、身体をとりまく、目に見えない境界線で囲まれた空間領域である(Sommer, 1969 穂山訳 1972)。したがって、他者によりその領域が侵害されると、警戒心を抱くこととなる(Middlemist, Knowles, & Matter, 1976)。また、Hall(1966 日高・佐藤訳 1970)は、他者との距離のとり方、すなわちパーソナル・スペースの維持の程度自体が他者への意思の伝達手段であるとする、プロクセミクス(proxemics)理論を提唱した。意思の伝達として、相手と親しく会話したいという意味があればパーソナル・スペースを小さくし、また逆に相手と親しく会話する意思がない相手に対しては大きなパーソナル・スペースをとると考えられる。

パーソナル・スペースの研究で問題となるのが、その測定方法である。測定方法は、①実験法、②観察法、③投影法の3つに大別される。各測定方法の特徴について、Hayduk(1978)や小西(2007)などの記述をもとに、Table 1に概観した。

本研究では、Novelli, Drury, & Reicher(2010)が新しく考案した現実世界状況法(real world situation method)を用いるが、Novelli et al.(2010)は、①実験法と③投影法において利用されることが多い停止距離法(stop distance method)<sup>2)</sup>の問題点を2点挙げている。第1に実験参加者にパーソナル・スペースが測定されていることが認識されていることであり、第2に実際に「現実世界」において実験参加者が求めているであろうパーソナル・スペースの大きさを実験において実験参加者が表わすことができないかもしれない

ということである。換言すれば、パーソナル・スペースに影響を及ぼす要因を統制するために実験状況を設定することによって、生態学的妥当性が失われてしまうことが問題である。

以上の問題に対処しようとする測定法が、人々が維持するパーソナル・スペースの大きさを自然観察によって測定する②観察法である。しかし、観察法もまた、小西(2007)が指摘するように(Table 1)、統制が不十分というデメリットがある。停止距離法の生態学的妥当性の欠如の問題に対処し、かつ統制もとれた方法としてGifford & Sacilotto(1993)とNovelli et al.(2010)による方法が挙げられる。Gifford & Sacilotto(1993)の実験では、パーソナル・スペースについての実験であることを知らない実験参加者が部屋に入ると、離れたところにいる実験者に近づくように指示された。実験参加者が実験者に近づいて停止した場所を持ってパーソナル・スペースが測定される方法であった。この方法では、測定が行われていることが意識されることなく、観察することが可能である。しかし、この方法でも、実験参加者にとって実験者に近づく理由はなく、人工的不自然さが完全に消えているわけではない。

Novelli et al.(2010)による現実世界状況法は、Gifford & Sacilotto(1993)の手法をさらに改善したものである。この方法では、初めに「これはコミュニケーションの課題である」と教示がなされ、実験参加者に対話相手(実験協力者のサクラ)との対話を義務づけた。そして、コミュニケーション課題を行うため、既存の配置の椅子を実験参加者にとっての適切な位置へと移動させて、椅子間の距離を測定し、これをパーソナル・スペースとした。この距離は、Hall(1966 日高・佐藤訳 1970)のプロクセミ

Table1 従来のパーソナル・スペースの測定方法の特徴・長所・短所

測定方法	特徴	長所	短所
①実験法	最も多く利用されているのが停止距離法(Hayduk, 1978)  被験者が部屋の中央に立ち、歩行速度で近づく方法であり、これ以上近づかれると、気詰まりであると感じられる地点で両者の距離を測定する方法(小西, 2007)	対人距離に影響を及ぼすと思われるさまざまな要因をコントロールできるという点で、非常に有効な方法(小西, 2007)	自然観察と比べ、その妥当性に疑問(Aiello, 1987)  「これ以上近づかれると気詰まり」という点があいまい(Gifford, 1997)
②観察法	街頭やレストラン、あるいは図書館など、日常的な生活場面での対人距離を観察する方法(小西, 2007)	日常生活における空間行動を知る上で、非常に有効な方法(小西, 2007)	自然な状況では行動に影響を及ぼすさまざまな要因をコントロールできない(小西, 2007)
【a】現場観察法 (フィールド法)			
【b】座席選択法 (座席配置法)	豊村(1998)の概観によれば、椅子と机しかない部屋で話す時、被験者に椅子に座るように勧め、どの椅子に座るかを調べる方法。あるいは、被験者が椅子を好きなところに動かして、実験参加者と向き合わせる方法(安藤, 1987)	この方法とパーソナル・スペースとの関係はそれほど明らかではない(安藤, 1987)	
③投影法	人形やシルエットなどの代用物を操作して距離を測定する方法(Duke & Nowicki, 1972)	方法として簡便なため、多くのデータを収集しやすい(今川, 1995)	妥当性に問題(Hayduk, 1983)  距離スケールを変換しなければいけないが正確に変換できるとは限らない (Gifford, 2002 羽生・楨・村松訳 2005)

ックス理論によれば、相手の表情が読み取れる個体的距離と、会話が容易にできる社会的距離の境界に相当する。また、日本における同様の研究では、西出(1985)の会話域(50~150cm)に相当する。

本研究では、Novelli et al.(2010)の方法を日本人において追試すると同時に、2つの状況変数について検討した。自然な状況でパーソナル・スペースを測定する現実世界状況法では、親近度が測定値に影響を与える可能性が高く、実際、Novelli et al.(2010)の結果でも、相手が所属する集団による影響を受けていた。相手へのメッセージであるとするプロクセミックス理論によれば、相手との距離のとり方は、互いの関係を示すものであり、対話相手が内集団であるか外集団であるというメッセージ

にもなる。また、内集団であるか外集団であるかがパーソナル・スペースに反映されることが考えられる。そこで、本研究では自己防衛説を立て、対話相手が①見知った人である内集団に対しては安心して近づくことができる、一方②見知らぬ外集団に対しては警戒して近づかないと予測する。

Novelli et al.(2010)の実験における集団は最小条件集団パラダイム(Tajfel, Flament, Billing, & Bundy, 1971)による内集団と外集団の区別であった。すなわち、黒点の数を推定する課題での偽のフィードバックによる操作で、類似の推定者であるとする相手を内集団、異なる推定者であるとする相手を外集団とした。その結果、対話相手が外集団に所属する場合よりも内集団に所属する

場合にパーソナル・スペースをより小さくすることが示された。

実際に、パーソナル・スペースは内集団相手には小さく、外集団相手には大きいということが示されており(e.g., Glick, Demorest, & Hotze, 1988)、彼らは、現実世界状況法では、人工的な集団形成でもその効果が生ずるということを示したが、現実の内集団と外集団の差異は検討していない。したがって、本研究では相手が知人である場合(親近度高条件)と知らない人である場合(親近度低条件)とで、パーソナル・スペースを比較する。

もう1つの状況変数は、実験参加者と対話相手の身長及び身長差である。Baxter(1970)は、子どもよりも青年、青年よりも成人のパーソナル・スペースが大きいことを示し、身体の大きさがこの理由であると推定した。また、青野(1979)は、年齢とともにパーソナル・スペースが大きくなることの要因の一つとして身体的要因を挙げており、成人と子どもでは身体の大きさが異なり、同じ物理的距離でも成人と子どもでは異なった意味を持つと指摘した。これらの推定の背景に、相手の身長が高いと、パーソナル・スペースを大きくするという結果(Hartnetta, Bailey, & Hartley, 1974)が考慮されている。しかし、Baxter(1970)、青野(1979)のどちらも身体的理由を挙げているが、成長とともに、身体の変化だけでなく、精神面や社会性なども発達するため、それらの影響も考えられる。また、性差の影響(Novelli et al., 2010; Evance & Howard, 1973; Uzzell & Horne, 2006)もあるため、本研究では、現実世界状況法を用いた場合の同年代・同性での身長の効果を検討する。

また、プロセミクス理論(Hall, 1966 日高・佐藤訳 1970)は、身長の影響を明確には予想していない。しかし、サクラが高身長である場合には、低身長の場合よりも参加者に威圧感を感じさせやすいと考えられるため、警戒によってパーソナル・スペースを大きくすることが予想される(Middlemist et al. 1976)。本研究では、現実世界状況法において、実験参加者の身長がサクラより低いと、実験参加者はパーソナル・スペースをより大きくすることが予測される。

以上から、本研究の目的は以下の2つである。第1は、現実世界状況法(Novelli et al. 2010)という新しいパーソナル・スペースの測定方法を日本人に用いて、より「現実世界」に近い状況で測定を試みることである。第2は、2つの状況要因の影響を検討することである。1つ目は、知人か否かという変数であり、2つ目は、サクラおよび実験参加者の身長や身長差であった。特に、身長・身長差要因については、自己防衛説を現実世界状況法において検証することが目的である。

## 方法

### 実験計画

1要因2水準(親近度高条件・親近度低条件)の被験者間実験計画であった。親近度高条件では、対話相手(サクラ)に、実験参加者が話したことがある互いに見知っている人が設定され、親近度低条件では、同じ大学であると推察できるが、実験参加者の知らない人が設定された。対話相手は同性であった。

### 実験参加者

実験参加者はK大学に所属する女子大学生計35名(19~22歳)であった。うち、親近度高条件16名、親近度低条件19名であった。親近度低条件の1名はパーソナル・スペースの測定の際(着席時)、実験参加者とサクラが正面に向きあった状態で測定が行われるはずが、斜めに着席したため、分析から除外した。実験参加者には、女子大学生によるコミュニケーション環境についての研究であり、あるテーマについて2人で意見を交わすことでコミュニケーション課題を行うと虚偽の説明をし、参加を募った。募集は、親近度を統制するため2つの方法で行われた。1つ目は、実験者があらかじめサクラを決定した上で、実験参加者1名を募集する方法であった。2つ目は、友人あるいは、知人同士の実験参加者2名を募集する方法であった。親近度の条件は参加者募集の方式によって操作したが、親近度低条件において、サクラと面識があった場合を考慮し、親近度の操作チェックを行った。また、面識があった場合であれば、どの程度の関係性であるかを確認するため、2冊目の質問紙による質問項目で相手との関係性の確認を行った。親近度の操作チェックの結果はTable 2に示した。

親近度高条件では、パーソナル・スペースを測定する上で測定状況の統制をとるために、実験参加者2名のうち1名に、実験者の指示通りの行動をあえて行うサクラになってもらうことを実験の途中で依頼し、許可を得た上で実験を行った。実験参加者の身長の平均値はTable 3であった。また、サクラの身長の平均値は156.0cm、 $SD=3.8$ であった。

### 実験材料

実験室は、2部屋(測定用実験室・ダミー用実験室)を用意した。実験参加者のパーソナル・スペースを測定する部屋(測定用実験室)の寸法は、幅386cm × 奥行272cm × 天井高225cmであった。測定用実験室には机2台(幅180cm × 奥行60cm × 高さ70cm)を設置した。測定用実験室に設置した机などの配置や寸法はFigure 1に示した。設置された机の上にある画面上において、誰もが知っているアニメーションのキャラクターについての映像が2分41秒間呈示された。実験参加者とサクラはキャスター付きの椅子(背もたれの高さ = 43cm、

奥行き = 45cm、幅 = 47cm、座位置の高さ = 約 45cm)に着席した。椅子は 4 脚使用した。キャスター付きの椅子を使用した理由は、自由に椅子を動かしやすいからであった。着席時は、配置する場所や大きさ、形状により影響を及ぼす可能性がある机は実験参加者とサクラの間には設置せず、パーソナル・スペースを測定する際は、椅子のみを使用した。同理由により、実験室は必要なもの以外は極力、置かないようにした。だが、映像の呈示及び、質問紙の記入の際に使用した机は移動させず、そのままの配置で椅子のみを移動させるように教示を行なった。不自然でない範囲で実験参加者に椅子を配置させた後、机に背を向ける位置側の椅子(Figure 1 椅子③)に座るよう促した。

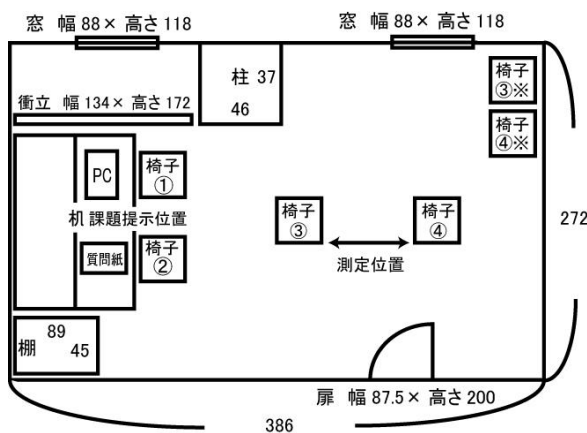


Figure 1 測定用実験室寸法(cm)および、パーソナル・スペースの測定位置

注)PCはパーソナル・コンピューターの略

## 質問紙

質問紙は、2 種類の冊子を用意した。1 冊目は、コミュニケーション課題を行うという偽の教示に基づき、スムーズにコミュニケーション課題が行われるためのダミー課題(誰もが知っているアニメーションのキャラクターについての質問紙)であった。質問紙の内容は、映像において呈示したアニメーションのキャラクターに関する質問 3 項目であった。

2 冊目は、表紙、フェイスシート、プライベート空間機能尺度(泊・吉田, 1999)<sup>9)</sup>、椅子間の配置距離の適切さを確認する質問項目で構成された。フェイスシートの質問項目は、①性別、②年齢、③身長、④所属、⑤コミュニケーション課題を行う対話相手との親近度の操作チェックの質問項目であった。親近度の操作チェックの質問項目では、コミュニケーション課題を一緒に行ってもらう予定の相手について当てはまると思う内容の数字に○をすように求めた(1.自分の弱みを見せてもいい(あるいは見せている)程、相手を信頼している関係だ、2.よく話し、

親しい関係だ、3.よく話すが、親しい関係ではない、4.見かけたことはあるが、話したことはない、5.全く知らない)。また、1~3 を親近度高条件とし、4、5 を親近度低条件とした(Table 2 の親近度番号に相当)。

Table 2 親近度の操作チェック

	親近度番号	人数
親近度高条件	1	5
	2	10
	3	0
親近度低条件	4	2
	5	17

注)実験参加者の 1 名は親近度番号を 1 と 2 の両方に○をしていた(1、2 の両番号はどちらも親近度高条件のため、データは除外せずに分析に含めた)。適切さでは「はい」に○をした。

椅子間の配置距離の適切さを確認する質問項目では、「意見交換をして頂くために椅子を配置していただき、実際に着席していただきましたが、適切な空間(距離)と感じましたか?」と質問を行い、「はい」「いいえ」のいずれかで回答を求めた。また、「いいえ」と回答した学生には、適切でないと感じた理由として最もあてはまる内容の数字に○をすように求めた(1.相手との距離が近いと感じた、2.相手との距離が遠いと感じた、3.何とも感じなかった、4.その他: 以下にご記入下さい)。

## 実験手続き

サクラ(知人同士で参加してもらった場合は 2 人のうち 1 人)と実験参加者は実験室で対面した。サクラと実験参加者は Figure 1 の壁側に並列して、配置されていた椅子③※、④※の席に着いた。次に、これからコミュニケーション課題を実施することをサクラと実験参加者に説明した。コミュニケーション課題を実施する前に、2 名別々の部屋で映像を呈示することや質問紙への記入を依頼することを説明した。その後、実験参加者に映像を呈示するため、サクラをダミー用実験室へ誘導し待機させた。また実験参加者募集の際、友人あるいは、知人同士で参加してもらっていた場合、ダミー用実験室へと実験参加者が移動した時点で本実験の本当の目的を説明して、サクラ役として協力してもらえよう説明と依頼をした。許可を得た後、サクラ役をお願いするにあたり、注意点を説明した。注意点の内容は、サクラが映像呈示後に測定用実験室に戻った際に、実験者は椅子の位置をずらしても構わないという内容の教示を行うが、サクラは着席する椅子の位置を着席する前後に関わらず、ずらさないように依頼するものであった。

実験参加者に測定用実験室にて映像を呈示した後、キャラクターについての質問紙(1 冊目)を配布した。質問紙が記入できたことを確認し、隣の部屋(ダミー用実験室)の様子を見てくることを告げ、その間に、実験参加者に実験参加者とサクラがお互い正面で向き合うことができるように椅子の配置替えを依頼し、実験者は退出した。具体的には、実験参加者に椅子③※、④※の位置から椅子③、④の位置への移動の依頼であった(Figure 1)。実験者はサクラを連れて測定用実験室に入室した。サクラが椅子に着席し、実験参加者とサクラが正面を向いて着席した時点で、「お話ししやすいように位置をずらして頂いて構いません」と告げた。また、椅子に座る深さがパーソナル・スペースに影響しないように統制するため、実験参加者には、「リラックスした状態で意見交換を行うために椅子に深く腰掛けてください」と教示した。次にコミュニケーション環境を正確に把握するために椅子と椅子間の距離を測定することを2人に説明し、許可を得て、椅子間の距離を測定した。測定位置は、お互いに向き合っている椅子の前方の角脚であり、椅子脚の幅は含めず測定した。次に、実験者はさも質問紙を呈示するのを忘れていたかのようにふるまい、コミュニケーション課題の前に質問紙(2 冊目)への回答を依頼した。その際にサクラは再度、ダミー用実験室に誘導し、待機させた。実験参加者が質問紙に記入を終えた時点で、「では、これからコミュニケーション課題を行って頂きますので、隣の部屋の様子を見てきます」と告げて退室し、実験者はサクラとともに測定用実験室に入室して、実験参加者とサクラの両名が同室にいる中で、実験参加者にデブリーフィングを行い、実験を終了した。

## 結果

親近度高条件、親近度低条件のパーソナル・スペースの平均値を、Table 3 に示した。2 条件の平均値について対応のない  $t$  検定を行ったところ、親近度高条件よりも ( $M = 77.8\text{cm}$ ,  $SD = 16.8$ )、親近度低条件で ( $M = 93.4\text{cm}$ ,  $SD = 14.6$ )、パーソナル・スペースが有意に大きいことが示された ( $t(32) = 2.89$ ,  $p < .01$ )。さらに、椅子同士の距離が適切だと回答した参加者のデータのみで、再度  $t$  検定を行った(高条件 11 名、低条件 16 名)。その結果、2 条件間のパーソナル・スペースの差には有意傾向がみられた ( $t(25) = 1.81$ ,  $p < .10$ )。

次に、各条件および両条件(高・低)のパーソナル・スペースと実験参加者の身長、サクラ役の身長、身長差(実験参加者とサクラ役の身長の差)とその絶対値について、各変数間の相関係数を算出した(Table 4)。その結果、両条件(高・低)のパーソナル・スペースと実験参加者自身の身長との間には、有意な正の相関がみられた ( $r = .41$ ,  $p < .05$ )。しかし、条件ごとに 2 変数間の相関係数を算出したところ、親近度高条件では変数間の相関はなく ( $r = .37$ )、親近度低条件のみでしか、有意な傾向はみられなかった ( $r = .47$ ,  $p < .10$ )。さらに、親近度高条件のパーソナル・スペースと身長差絶対値(実験参加者とサクラの身長差の絶対値)の間には、正の相関傾向がみられた ( $r = .45$ ,  $p < .10$ )。

また、実験参加者の身長、サクラの身長、および親近度を説明変数、パーソナル・スペースを目的変数とした重回帰分析を行った(Table 5)。分析の結果、実験参加者の身長 ( $\beta = .38$ ,  $p < .05$ )、親近度 ( $\beta = -.44$ ,  $p < .05$ ) は、それぞれ、パーソナル・スペースを有意に説明することがわかった。つまり、パーソナル・スペースに影響を

Table 3 各条件のパーソナル・スペースについての記述統計量および実験参加者の身長の平均値

条件	$N$	パーソナル・スペースの 平均値	パーソナル・スペースの $SD$	実験参加者の 身長の平均値
親近度高条件	16	77.8(cm)	16.8	154.3(cm)
親近度低条件	18	93.4(cm)	14.6	155.6(cm)
両条件(高・低)	34	86.0(cm)	17.3	155.0(cm)

Table 4 条件ごとの、パーソナル・スペースと各変数間の相関係数

	参加者の身長	サクラの身長	身長差	身長差(絶対値)
親近度高条件 PS( $N = 16$ )	.37	-.06	.34	.45 <sup>†</sup>
親近度低条件 PS( $N = 19$ )	.47 <sup>†</sup>	.21	.36	-.21
両条件(高・低)( $N = 34$ )	.41*	.21	.25	.03

注) \* $p < .05$ , <sup>†</sup> $p < .10$

Table 5 強制投入法による重回帰分析の結果

	<i>B</i>	<i>SEB</i>	$\beta$	<i>t</i>	<i>p</i>
参加者の身長	1.00	0.39	.38	2.53	.02
サクラの身長	0.13	0.73	.03	0.18	.86
親近度	-14.88	5.62	-.44	-2.65	.01
身長差 (絶対値)	0.54	0.59	.14	0.93	.36

注)  $N=34$

与えるのは自分自身の身長であり、相手の身長ではないこと、そして身長の高い人ほどパーソナル・スペースを大きくとることが示された。

### 考察

本研究は、現実世界状況法を用いることにより、現実世界に近い状況でのパーソナル・スペースの測定を試みたと同時に、二つの状況要因(親近度・身長)との関係からパーソナル・スペースに及ぼす影響を検討した。

親近度高条件よりも親近度低条件の測定距離(パーソナル・スペース)が有意に大きかった(Table 3)。このことから、相手との親近度が、現実世界の自然な状況で話し合いをする上でのパーソナル・スペースに影響を与える可能性があることが示された。

また、本研究で測定されたパーソナル・スペースは西出(1985)による会話域(50~150cm)に相当するが、この会話域は日常の会話が行われる距離で、80cm 以上はややフォーマルな会話とされている。ゆえに現実世界状況法で測定されたパーソナル・スペースは妥当であると考えられる。なお、現実世界状況法を用いた Novelli et al.(2010)と本研究のパーソナル・スペースの結果は、Novelli et al.(2010)の内集団条件では 46.56inch(約 118cm)、外集団では 51.15inch(約 130cm)、条件間の差異が約 12cm であった(本研究の結果は Table 3)。Novelli et al.(2010)と本研究でのパーソナル・スペースの大きさに違いがみられたのは、本研究の実験参加者は日本人であり、西洋人とは身体の大きさ、社会階層、文化等の違いがパーソナルスペースに影響していると考えられる。

さらに、本研究ではサクラと実験参加者の身長を測定したが、相手の身長が高いと、パーソナル・スペースを大きくするという結果(Hartnetta et al., 1974)は支持されなかった。また遠山・小塩・内田・西口(2006)では、接近者の身長が被接近者(実験参加者)のパーソナル・スペースの大きさに影響すると示唆されていた

が、本研究では実験参加者自身の身長が影響するという結果であった。つまり自己防衛説を棄却する結果となった。本研究の結果より、他者との距離の取り方は自己防衛としてではなく、他者への配慮が働いたためではないかと考えられる。相手の身長が大きく威圧感や不安を感じることでより距離をとる自己防衛説に対し、配慮仮説では自分の身長を考慮し、相手に威圧感や不快感を与えないように配慮するため、実験参加者自身の身長が影響したのではないだろうか。この点に関しては本研究では内観をとっていない為、一考察に留めておく。また本研究の問題点は第一に、測定時は着席時にも関わらず、座高を測定せず、身長によって検討したことである。ただし、参加者は身長から着席時の他者との距離を推定し椅子を配置しているので、本研究から得られた結果を否定するほどではないと考えられる。第二にパーソナル・スペースの測定の位置である。向き合っている椅子の前方の角脚を測定したが、足の長さには個人差があるため、お互いの膝と膝の距離を測定したほうがより、適切な測定ができたはずである。

本研究では、実験参加者はすべて女子大学生であったが、Novelli et al.(2010)、Evanck & Howard(1973)、Uzzell & Horne(2006)では性差が指摘されており、男性では、異なるデータが得られる可能性もある。また、本研究では、アニメーションのキャラクターをテーマにしたダミー課題を用いた。現実世界状況法では状況的影響を受けやすいとすれば、たとえば政治を話題として議論を交わすようなものと本研究のように(実際にコミュニケーション課題を行っていない)誰にでも身近な話題で、ほとんどの人がいいイメージを持つようなアニメーションのキャラクターを話題のテーマとして各々の参加者がそのキャラクターに対する自由な感想を述べるだけのようなものとは、後者の方がリラックスした状態であると考えられるため、パーソナル・ス

ペースは違ったものになる可能性がある。

## 引用文献

- Aiello, J. R. (1987). Human spatial behavior. In D. Stokols, & I. Altman (Eds.), *Handbook of environmental psychology*. New York: Wiley.
- 安藤 孝敏 (1987). 個人空間—概念と測定方法—. 早稲田大学大学院文学研究科 文化研究科紀要, 14, 39-47.
- 青野 篤子 (1979). 対人距離に関する発達的研究. 教育心理学研究, 19, 97-105.
- Baxter, J. C. (1970). Interpersonal spacing in natural settings. *Sociometry*, 33, 4, 444-456.
- Duke, M. P., & Nowicki, S., Jr. (1972). A New measure and social learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in personality*, 6, 119-132.
- Evance, G. W., & Howard, R. B. (1973). Personal Space. *Psychological Bulletin*, 80, 334-344.
- Gifford, R. (1997) *Environmental psychology*. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Gifford, R. (2002). *Environmental Psychology: Principles and Practice (3rd ed.)*. (ギフォード, R. 羽生 和紀・榎 究・村松 陸雄(監訳) (2005). 環境心理学—原理と実践—(上巻) 北大路書房)
- Gifford, R., & Sacilotto, P. (1993). Social isolation and personal space: A field study. *Canadian Journal of Behavior Science*, 25, 165-174.
- Glick, P., Demorest, J. A., & Hotze, C. A. (1988). Keeping your distance: Group membership, personal space, and requests for small favors. *Journal of Applied Social Psychology*, 18, 315-330.
- Hall, E. T. (1966). *The hidden dimension*. New York: Doubleday.  
(ホール, E. T. 日高 敏隆・佐藤 信行 (訳) (1970). *かくれた次元* みすず書房)
- Hartnetta, J. J., Bailey, K. B., & Hartley, C. S. (1974). Body height, position, and sex as determinants of personal space. *The Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied*, 87, 129-136.
- Hayduk, L. A. (1978). Personal space: An evaluative and orienting overview. *Psychological Bulletin*, 85, 117-134.
- Hayduk, L. A. (1983). Personal space: Where we now stand. *Psychological Bulletin*, 94, 293-335.
- 今川 峰子 (1995). 人間の生活空間と空間認知. 空間認知の発達研究会 (編), 空間に生きる—空間認知の発達の研究—. 北大路書房 pp. 174-190.
- 小西 啓史 (2007). 空間行動 佐古 順彦・小西 啓史(編) 朝倉心理学講座 12 環境心理学 朝倉書店 pp. 66-87.
- Middlemist, R. D., Knowles, E. S., & Matter, C. F. (1976). Personal space invasions in the lavatory: Suggestive evidence for arousal. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 541-546.
- 西出 和彦 (1985). 人間の心理・生態からの建築計画①人と人との距離 建築士と実務, 5, 95-99.
- Novelli, D., Drury, J., & Reicher, S. (2010). Come together: Two studies concerning the impact of group relations on personal space. *British Journal of Social Psychology*, 49, 223-236.
- Sommer, R. (1969). *Personal Space: The behavioral basis of design*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.  
(ソマー, R. 穂山貞登 (訳) (1972). 人間の空間 鹿島出版会).
- Tajfel, H., Flament, C., Billing, M. G., & Bundy, R. F. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-177.
- 泊 真児・吉田 富二雄 (1999). プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係. 社会心理学研究, 15, 77-89.
- 遠山 孝司・小塩 真司・内田 敏夫・西口 利文 (2006). パーソナル・スペースに影響を及ぼす要因の検討—身長, アイコンタクト, 向性に着目して— 中部大学人文学部研究論集, 16, 115-128.
- 豊村 和真 (1998). パーソナルスペース試論 北星論集(社), 35, 111-119.
- Uzzell, D., & Horne, N. (2006). The influence of biological sex, sexuality and gender role on interpersonal distance. *British Journal of Social Psychology*, 45, 579-597.

## 註

- 1)本研究は筆頭著者の平成23年度学士論文(神戸女学院大学人間科学部・心理行動科学科)を一部加筆・修正を行ったものである。本研究の遂行にあたって、神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科小林千博先生には本論文のご指導を頂いた。本研究の問題のパーソナル・スペースの従来の研究(測定法)では、高松大学発達科学部向居暁先生に有益なご助言を頂いた。ここに記して感謝いたします。
- 2)実験法における停止距離法は実測による測定法であり、実験参加者が気づまりと感じた地点で実験者と実験参加者の距離を測定するのに対して、投影法における停止距離法は人形や絵等を用いて、実験参加者が気づまりと感じるであろう地点で実験者と実験参加者の距離を測定するものである。ちなみに接近の方法は第一に実験者が実験参加者に近づいていく方法と第二に実験参加者が実験者に近づいていく方法がある。
- 3)当初、このプライベート空間機能尺度は、併存



的妥当性を検討するために実施したが、あまり適切でなかったために分析から除外した。

4) 実験者の意図として、測定した時点では、本研究の真の目的を知らない・気づいていないという事をふまえて測定しているの、(あえて、パーソナル・スペースを測定した後に質問紙に意識的に適

切さを答えさせているが)そもそも近い・遠いという距離の適切さ自体を意識しない実験参加者がいる可能性を考慮し、3「何とも感じなかった」という選択項目を入れた。結果的に、3 を選択した実験参加者はいなかった。

## Measurement of personal space by a real world situation method

Chiaki YAMAGUCHI(*Graduate School of Humanities, Kobe University*)

Hiroshi YAMA(*Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University*)

The present study measured “personal space” using the real world situation method (Novelli et al., 2010), and examined the influence of two factors (degree of intimacy / height) hypothesized to affect preference for personal space. Each female participant ( $N=34$ ) was asked to discuss a familiar topic (a filler task) with a confederate and to adjust the distance between her seat and the confederate’s so as to create a comfortable personal space. Participants were assigned to either a high-intimacy condition with a known confederate or low-intimacy condition with an unknown confederate. When participants were unfamiliar with the confederate, they maintained a larger personal space. Furthermore, taller participants tended to maintain a larger personal space. These results, in conjunction with the results from a follow-up questionnaire, suggest that people create physical distance not so much as a form of self-protection, but rather as a way to demonstrate consideration for others.

Keywords: personal space, real world situation method, ecological validity, degree of intimacy, height.